

ともに広げ、ともに深める「やりくり」授業の設計(1 年次)

岡 真奈美

鳥取大学附属中学校

E-mail: oka-m@tottori-u.ac.jp

OKA Manami (Tottori University Junior High School): Designing a "YARIKURI" class to expand and deepen thinking together (1st year)

要旨 — 鳥取大学附属中学校(以下 本校)では、数年にわたって「やりくり」授業という言葉キーワードに授業づくりに取り組み、思考力・判断力・表現力を養おうとしてきた。その研究を総括し、本校教員が考える「生徒に伸ばしてほしい力」を設定した。その力を「他者と関わり合う力」「課題に向かう当事者意識」の2点に絞り、本年度より研究をはじめた。

キーワード 他者と関わり合う力 当事者意識

Abstract — For several years, Tottori University Junior High School (hereafter referred to as "our school") has been trying to develop thinking, judgment, and expression skills by creating classes with the keyword "YARIKURI" class. This year, we summarized the research, discussed the actual conditions of the students, and held a workshop by our school's teachers on the "abilities we want our students to develop. We narrowed down the "skills we want students to develop" to "the ability to interact with others" and "a sense of ownership toward issues," and began our research this year.

Key words — Ability to relate to others ,awareness of the parties concerned.

1. はじめに

昨年度まで、鳥取大学附属中学校(以下、本校)では「やりくり」授業という言葉キーワードに授業づくりに取り組んできた。

従来の授業では、教師の設定した目標に到達するために授業が設計されることが一般的である。それに対して「やりくり」授業とは、答えや解法が1つに定まらない問いを設定した授業を意味している。その問いに向かうためには、生徒は既存の知識や技能をどのように使うか、必要な情報をどのように獲得するかを考える必要があり、その過程で、思考力・判断力・表現力を養おうとしてきた。

4年間の研究を経て、昨年度2月に総括と次の課題設定のために話し合いを行った。なぜなら、昨年度までの研究主題を設定した当時の教員が半減し、私たちの問題意識を再度確認し、共有する必要に迫られたためである。

昨年度最後の研究職員会では、ICT の活用体験を兼ねて Jam board を使用した意見交換を行った。(図1)

2. 研究主題について

昨年度2月に開催した研究会では、本校の生



図1 ワークショップの様子

徒の良さや課題について話し合い、授業者が子どもたちにどのような力を身につけさせたい

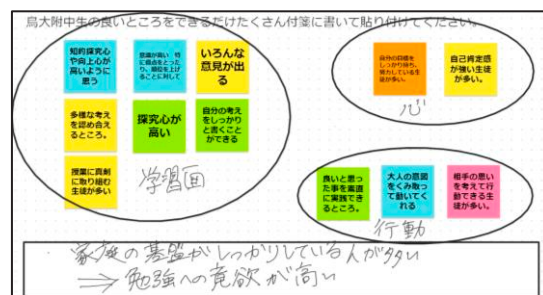


図2 グループの共有ボード

かを共通理解することができた。

本校の生徒の良さとしては、豊かな発想、学ぶ意欲の高さ、考えを表現するときのパフォーマンスのうまさなどがあげられ、

これらは「やりくり」授業の成果の一つと言える。(図2)

各グループから出された意見をまとめると本校の教員が課題だと感じ、伸ばしていきたいと思っている力は、以下の2点にしばられた。

1 点目は「他者と関わり合う力」。例えば、夢を語り合う力や自治力、雑談力、コミュニケーションによる人間力の向上などが上がった。弱さも認め合えることや、仲間と混ざり合って伸ばしていくことのできる力など、多様な他者とのかかわりに関する記述が多くみられた。これには、他人とのかかわり合いを通して学びを深めてほしいという授業者の願いが見られた。(図3)

2 点目は「当事者意識」。本校に限らず、学習において点数にこだわる生徒が多い傾向が見られる。

しかし、本校の教員は点数に現れる力以上に教科本来の楽しさを感じる力や好奇心をもって学

びにのめりこむ力、自分の学びであるという自覚が育ってほしいと願っている。

とくに、学校生活や学びの時間は大人から与えられ、準備されているものではなく、自分たちで作り上げるものだという当事者意識を育てていきたいという思いが現れていた。(図4)

本年度は「やりくり」授業を通して、先にあげた2点を育てていきたいと考え、研究主題を設定した。

「ともに広げ、ともに深める」とは、多様な他者とのコミュニケーションを通して、自分ごととして課題に向かっていけるような授業づくりを意図している。

「ともに広げ」とは、昨年度までの研究主題であった「やりくり」授業の中で授業者が生徒に要求してきたラテラルな思考(岡, 2023)を他者とのかかわりをより意識した活動にしたものである。これは、イギリスのE=デボノが1967年ごろ唱えた思考法で、彼は「一つひとつ段階を踏まない思考プロセスを通して、あるいは異なる角度から状況を変えることによって、問題の答えを得たり、新しいアイデアを生みだしたりすることが可能になる」と述べている。(E=デボノ 2015)

表1 G7教育大臣会合②
【倉敷宣言(骨子)】より

新しい時代に求められる資質・能力の育成
新たな時代に求められる資質・能力として、
・自ら新たな問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくための力の育成を強調。
・教育実践の基盤として、①何を知っているか、②知っていることをどう使うか、③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか、という視点を持つことの重要性を強調。

表2 令和の日本型学校教育

子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要である。

令和の日本型学校教育(2021)

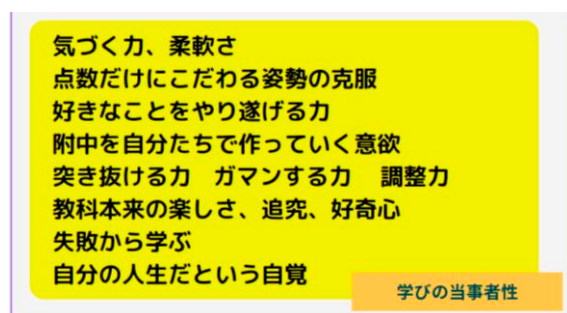


図3 学びの当事者性

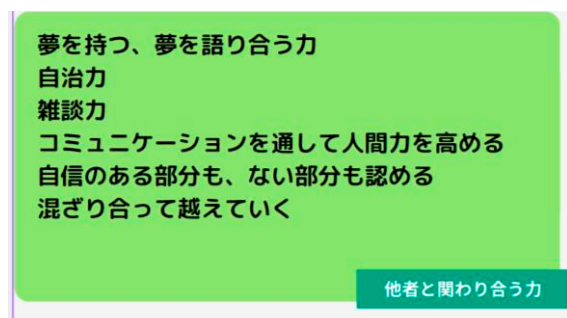


図4 他者と関わり合う力

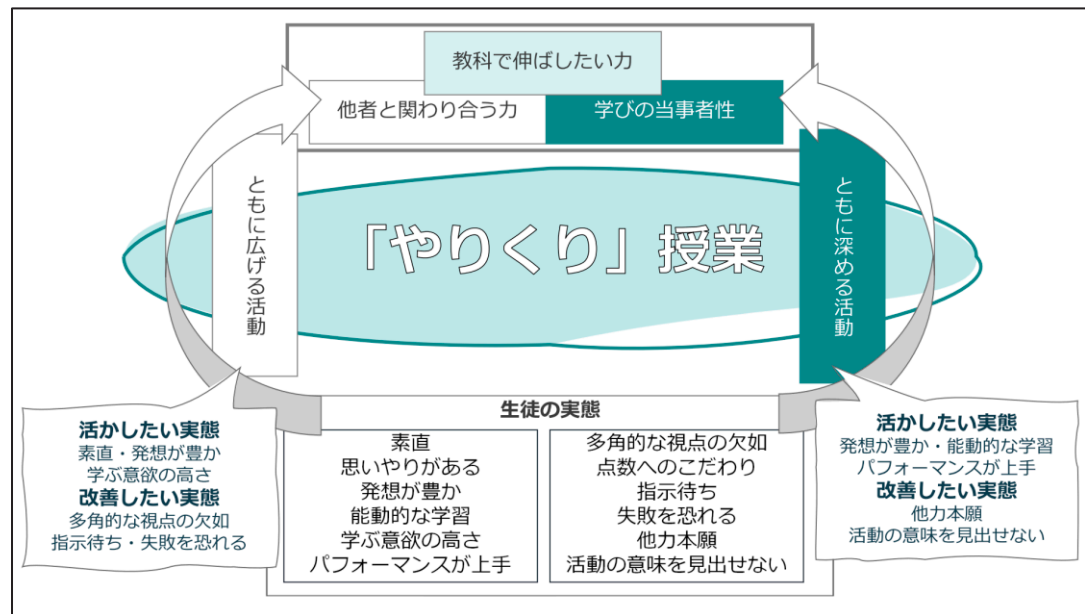


図5 研究構想図

一方、「ともに深める」とは、垂直思考とよばれ、水平思考と対比される思考方法を意味している。水平思考がクリエイティブ・シンキングに分類されるのに対し、垂直思考はロジカルシンキングに分類される。これはできるだけ多くの「データ」「事実」を集めて、そこから「正しいひとつの答え」を導きだそうとする思考法（松林 2003）である。この思考を他者と共に行うことで、対話が生まれ、提示された課題をより自分ごととして捉えることができるのではないだろうかと考えた。

また、周知のように、近年学校教育において他

者との協働が注目されている。2016年に行われたG7の教育大臣会合における倉敷宣言では、新しい時代に求められる資質・能力について、次の2点が強調されている。（表1）

1点目は「自ら新たな問いを立ててその解決を目指し、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくための力」

2点目は「何を知っているか、知っていることをどう使うか、どのように社会と関わり、よりよい人生をおくるか」

1点目の「自ら新たな問いを立ててその解決を

表3 本年度の研究の流れ

4月	第1回研究委員会	研究とは何か	全教員へのガイダンス これまでの授業の振り返り
5月	第2回研究委員会	研究大会に向けて	各教科での目標設定 研究構想シートの紹介
6月	第3回研究委員会	授業づくり	藤村先生とのオンラインミーティング
6月	第4回研究委員会	授業づくり	藤村先生とのオンラインミーティング
7月	第5回研究委員会	研究大会詳細	各教科の授業検討
7月	研究発表大会		
11月	第6回研究委員会	研究紀要作成にむけて	紀要の書き方 検証方法の紹介
12月		研究紀要作成にむけて	
1月		原稿完成	研究推進部による点検作業
2月		2次締切	各教科による点検作業
3月		紀要製本	

目指すこと」や2点目の「知っていることをどう使うか」は「やりくり」授業そのものであり、「他者との協働による新たな価値の創造」や「社会・世界との関わり」、「よりよい人生への活用」は本校の教員の課題意識にあがっていた「他者と関わり合う力」「学びの当事者性」にそれぞれつながると考えられる。2021年に中央教育審議会から出された「令和の日本型学校教育」についての答申の中にも同様の文言が見られる。(表2)

ともに広げる活動を通して、他者の意見に触れることで新たな気づきが得られることを実感し、ともに深める活動を通して、課題解決に向かう当事者として自分なりの意見を確立していけると考えられる。

3. 本年度の研究の流れ

上記の意図を基に、本校の授業づくりのイメージをまとめた。(図5)生徒の実態を活かしたともに広げる活動、ともに深める活動を授業づくりの中に組み込むことで、「やりくり」授業がこれまでよりも効果的に活用できるのではないかと考えた。

本年度の流れは表3の通り。本年度は、特に研究授業のための授業、紀要作成のための研究にならないよう、年間を通じて教員個人の良さを生かした授業づくりが行えることを第一に考えて計画を立てた。

また年度当初に各教科の研究の方向性を位置づけ(表4)、校内で共有することで研究の話し合いを円滑に進められるように配慮した。

さらに、研究発表大会での授業づくりに向けて、研究協議を2回開催し、東京大学大学院教育学研究科 藤村宣之教授にオンラインでご指導いただき、それぞれの教員が授業づくりに取り組んだ。藤村教授はかねてより、協同的探究学習という学習方法の研究、開発をされている。(藤村 2018)

この協同的探究学習には授業の中核となる「非定型問題」を設定されており、このスタイルが本校の取り組みである「やりくり」授業と類似性が

高いと考え、数年にわたって指導をしていただいている。

4. 成果と今後の課題

本年度は、これまでの「やりくり」授業に加え、他者との関りを意識した授業設計をめざした。来年度以降も継続して、研究主題を意識した授業設計に取り組み、生徒の意識の変化を追っていきたい。

また ICT の活用によって、学級の多くの人の意見に触れることができるようになり、他者と関わることで思考をより深められる生徒の育成ができるのではないかと考えられる。

・参考文献 資料

岡真奈美(2023)「やりくり」授業の成果と今後の展開
鳥取大学附属中学校研究紀要, 54, 1-3

E=デノボ, 藤島みさ子訳(2015):「水平思考の世界」
p.4

松林博文(2003)「クリエイティブ・シンキングー創造的発想力を鍛える20のツールとヒント」p.14

G7 倉敷教育大臣会合 倉敷宣言(骨子)
https://www.mext.go.jp/a_menu/G7/index.htm

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm

藤村宣之(2018)『協同的探究学習で育む「わかる学力」ー豊かな学びと育ちを支えるためにー』ミネルヴァ書房

表 4 令和5年度 各教科の方向性

教科名	教科で伸ばしたい力	構成要素
国語	多面的・多角的に考え、自分の考えを構築する力	<ul style="list-style-type: none"> ・他者との交流の中、課題解決に向けた確に質問する力 ・友達の意見を踏まえ、自分の考えを客観的に自己調整しようとする力
数学	自ら問を立てて自ら答えていく探究者のような姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの既習の学習との関連を見出せないか、利用できないかという視点をもつ。 ・自分が必要だと考える新たな知識・技能を獲得しようとし、その真偽を確かめるために、理由や根拠を求めようとする。
理科	科学的に考える力	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な事物から課題を見だし、仮説を設定する力 ・身近な現象を科学的に説明する力 ・探究の過程で必要な総合的な力
社会	自分の考えたことを表現する力	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠をもとに自分の考えを組み立てる力 ・適切に資料を活用する力
英語	他者を意識して自分の考えを表現する力	<ul style="list-style-type: none"> ・対話を通して自身の考えなどを広げたり、より適切な英語表現をするためにやりくりし調整しようとする力 ・必要な情報を判断・整理し、相手に伝わりやすい文を構成する力
音楽	習った知識を生かして想像し表現する力	<ul style="list-style-type: none"> ・楽譜から作曲者のメッセージを読み取る力 ・曲想を感じ取り、表現をふくらます力
美術	自分の発想を表現する力	<ul style="list-style-type: none"> ・根拠をもとに自分の考えを伝える力 ・様々な視点から作品を読み解く力
保体	自分の経験や能力に応じて、運動の内容や強度を選択できる力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や仲間の経験や能力を客観的にとらえる力 ・自分に適した目標を考える力
技術	よりよい生活の実現や持続可能な社会の構築に向けて、生活を工夫し、創造する力	<ul style="list-style-type: none"> ・理想とする生活や社会をイメージする力 ・生活や社会の中から問題を見出して課題を設定する力 ・設定した課題に対して、解決に向けて取り組む力
家庭	知識・技能を活用して、生活の課題をよりよく解決する力	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や自分の家庭・地域の生活を批判的に捉え「問い」を設定する力 ・問いの解決のために、他者と協同的に学ぶ力 ・学んだ知識・技能を活用できる力
健康	困難な問題に直面した際に不快な気持ちに過度にとらわれずに価値に添った行動を選択できる力（ACT）	<ul style="list-style-type: none"> ・ストレスがかかったときに、そのことばかりにとらわれない力 ・不快な気持ちと戦わずにあるがままとして受け入れる力 ・自分が大切にしているものに気付き、よりよい人生のために行動する力